

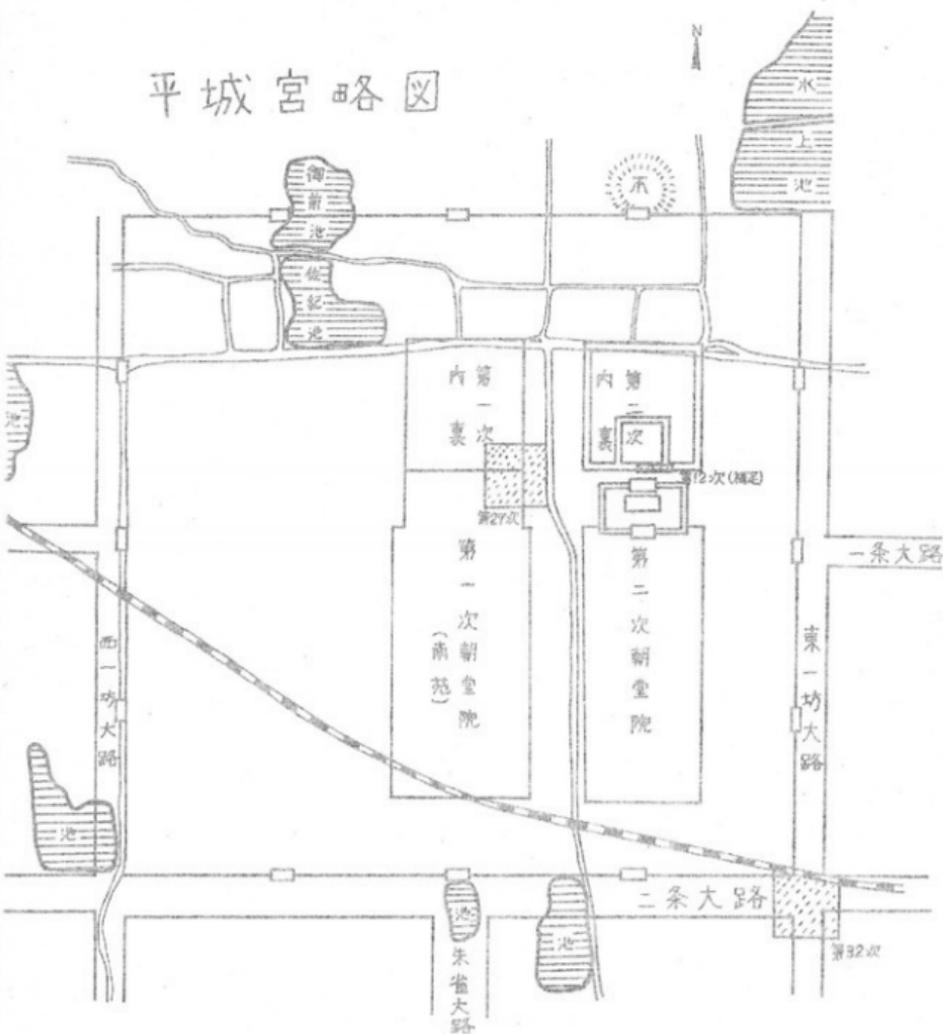
# 平城宮第27.32次発掘調査概報



昭和41年2月

奈良国立文化財研究所

# 平城宮略図



表紙カット

第32次調査出土線軸図

## 平城宮第27・32次発掘調査概報

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部は、昭和40年度の特別史跡「平城宮跡」の発掘調査を、第22次(前)以降第30次までおこなっている。ここでは、前回概要報告した第22次(前)・25・26次にひきつづいて、第27次調査と第12次補足調査について、その概要を報告する。また、第30次調査では遺構検出がほぼ終了したので、現在なお調査進行中であるが、その中間報告を併記する。

第27次調査は、宮域中央北半の第一次内裏想定地区の調査であり、第12次補足調査は、第一次内裏正面の築地回廊および閘門の調査である。また、第30次調査は、国道24号線バイパス建設にともなう緊急調査としておこなったものであり、宮域東南隅と二条大路、東一坊大路交点についての調査である。

各次別の調査地区の発掘面積と発掘期間は次表のとおりである。

次 取	調 査 地 区	面 積	期 間
第27次	6A B D-D, 6A B E-K, 6A B Q-B, 6A B R-P.	65.9	40.7.24~ 41.1.17
第12次補足	6A A Q-B・D・F	5.6	40.11.15~ 40.12.6
第30次	6A A I-L~R	60.0	40.12.13~

### I 第27次調査

発掘地帯は、築地股跡とみられる土塁が、鉤の手扶けつらなっているところを中心として西地区にわかれている。

土塁の東西部分およびそれ以北の東半(土塁南北部分以東)のBD-D地区(15.6a)、西半(土塁南北部分およびそれ以西)のBQ-B地区(17.3a)、土塁の東西部分以南の東半(土塁南北部分以東)のBE-K地区(16.3a)、西半(土塁の南北部分およびそれ以西)のB

R-P地区(15.22)の西地区である。発掘地域の築地形は、南東側に向かうやかに傾斜しており、そのため、南半(BE・BR区)では段上をもって遺構面を形成している。また、発掘地域の北半(BD・BQ区)は、後の削平をうけてかなり遺構が破壊されている。

検出した遺構は、竪穴・掘り・廊下・築地溝・溝ノノ・竪ノノ・土伝クなどである。そのうち、平城宮に關係をもつものは、基本的にA・B・Cの3時期にわけることができる。

A期は古い南北築地によって、B期は南北廊によって、またC期は新しい築地によってそれぞれ代表される時節である。なお、木植暗渠をもうけた段階をB期とする。

## A 期

A期にぞくする遺構には、南北築地・築地西側の東西掘・築地東側の東西掘・それに付随する門・東西溝(下層)・凝灰岩竪暗渠・玉石竪暗渠・南北大溝(下層)その他がある。

南北築地SA3800は、発掘地域の中央を南北に貫通している。しかし次期の南北廊SC3700の構築の際上層を削平しており、現存するのは基礎地固めのみであって、竪柱などの遺構は検出できなかった。築地本体は幅2.2mで、その東西に犬走り(幅3.5m)と溝(幅0.4m)とをそなえている。

発掘した築地のほぼ中央の西側には、1.4mの間隔をおいて、東西掘2条SA3805を検出した。

この掘は柱間3.65mであって、その東端は南北築地にとりついており、西端は発掘地域外にのびている。

いっぽう築地の東では、築地の西側で検出した東西掘SA3805のうち北列の、ほぼ東延長線上に、3.65m間隔の東西掘SA3780があり、西端は築地にとりつき、東端は南北大溝SD3705になっっている。この東西掘には、大溝側に片寄って、2.2m間の門があり、両柱穴とも下層に礎石をのこしていた。

東西掘SA3780の南側1mには、築地の西側からはじまり、南北

大溝SDヨク75 につづる東西溝SDヨク74 (幅6.7m)がある。東西溝は築地SAヨ800 の部分では炭灰岩の暗渠となっており、門の前では玉石積み暗渠としている。

ただし炭灰岩暗渠は、底石の痕跡をとどめるのみである。また、玉石積み暗渠は底石と割石一段をのこしているほか、二段目の割石を一部とどめているのみで上半が削平をうけている。

この二段目の割石の存在によって、この部分以北が南側よりも一段高くなっていた可能性が考えられる。

東西溝SDヨク74 が注ぐ南北大溝SDヨク76(幅3m)は、上・下2層にわかれている。東西溝からの排水をうけるのは、この下層であって、東西溝の存在から、南北大溝がA期にはじまる溝であることがわかる。

その他A期にぞくする遺構としては、BE区で検出した柱穴2個SKヨク68がある。うち1つの下底には礎石が残存していた。

#### ② B期

B期にぞくする遺構には、南北廊・石敷南北溝・築掘南北溝・土坑などがある。

南北廊SCヨク77は、A期の築地SAヨ800 の東側に、それと並行して検出した。廊は築掘地域の南北に貫通しており、基礎(幅6m)の築成には一部旧築地を利用している。基礎中央には4.6m程度の南北柱列がある。廊は一本柱列でありながら基礎をもつこと、さらに屋根と壁とをそなえているなど特異な構造である。基礎の両側には、犬走りとみられる部分(幅6.3m)があり、その西には石敷南北溝SDヨク79(下層)、東には築掘り南北溝SDヨク65(幅4.6m)がある。廊の東側の犬走り面とみられるところには、南北につらなる多くの偏折で壁土と瓦との堆積をみとめた。これらは廊にぞくするものである。

B期にぞくする遺構としては、他にBD地区に土坑SKヨク55、SKヨク66、BE地区にSKヨク30、BR地区にSKヨク87が

あるにすぎない。

## B 期

B期にぞくする遺構には、木樋暗渠・石敷南北溝（上層）・南北大溝（上層）・懸舎がある。

木樋暗渠S Dヨククは、礎基壇西側の石敷南北溝S Dヨクク（上層）からの流れをつけて、東の南北大溝S Dヨクク（上層）にそそぐ東西タノメの暗渠であつて、木樋ク木をあいっらねている。

木樋暗渠は廊の柱掘方をきつており、樋がとおされたとき、基壇上のタノメ等間の構造物がなかつたことをしめしている。ただし、BR地区では、廊のタノメ等間の各柱穴間に、別のタノメ等間の柱列があるので、あるいはこの部分の廊が改修されたのかもしれない。

石敷南北溝S Dヨクク（上層）の木樋暗渠への水のとりいれ口は石敷を一部削り、その南・北端を特に整覆みの礎で縁どりにして、水の流入を容易にしている。なお、BQ地区における石敷南北溝（上層）は、その縁をやはり整覆みの礎で縁どっている。

廊の基壇上には、タノメ等間の南北柱列SAヨククが5条抽出された。懸舎（仮設建物）の柱列とみられる。

東2列が1対をなし、西の3列のうち、東列と西の2列とがそれぞれ対になっており、都合3回の仮設が考えられる。

## C 期

C期にぞくする遺構には、築地・柵列がある。

築地SAヨククは、東側と南側とが抽出された。

東側の築地は、B期の南北基壇SAヨククを利用したものであり、南側の築地は、A期の南北築地西側の2列の東西柵列SAヨククの中心線上に、東西部分を付加したものである。

南側の築地は比較的良好く基部部がのこっている。不揃（幅2.5m）の南に接して溝（幅1m）があり、さらに南に犬走り様の基礎（幅3.3m）をそそえている。南面築地の東端近くには、灰灰岩暗渠S Dヨククがあるが、この暗渠に接続する溝は、削平をうけて、築地の南に南北に

も現存していない。

E・B区には、河のそばにマツタケ等間の棚るAヨフタロがある。その東面には、門と知られる柱間5.7mの箇所がある。

右にあげた遺構のほか、B期とC期との間におかれるものとして、BQ・BR区の敷SKヨクマ、石敷南北溝の西方一番に敷かれたバラス、南面築地南側の不整形の縁SDヨクマがあるが、発掘の所見から、C期の構築に関係あるものと想定される。

A・B・C各期のうちB期については、南北線の東大走りに多量に検出した軒瓦が、6306、6284、6664Cであることにより、その年代を第二次内裏の時期にもとめることができる。

したがって、A期は第一次内裏の時期に、またC期は平城上皇の年代に想定できる。

第2次発掘調査の主目的は、第一次内裏の存在を遺構の上で確認することにあつた。調査の結果、従来、第一次内裏の築地痕跡と想定していた、遺存の土塋は時期のさがるものであることが判明した。

しかし、第一次内裏の時期に、現存土塋南北部分の直下、およびその南延長線上に、南北築地の存在したことを確認した。内裏・朝堂院地区の東を囲む築地の可能性がある。

また築地西の2列の東西欄は、内裏内部を囲むものであろう。しかし、これらの遺構の性質の決定については、さらに広範囲な地域の発掘調査をまたなければならぬ。

平城宮以前の遺構としては、BR地区の溝SDヨクマ、土塋SKヨクマ、BQ地区の土塋SKヨクマ、SKヨクマ、BR地区における方位を把握した建物2棟SBヨクマ、SBヨクマがある。溝・土塋は古墳時代にそくしており、建物もその年代にさかのぼる可能性はある。

出土遺物には、瓦・埴・土器・木簡・木槌・柱根・炭板などがある。瓦では、従来知られている6303C-6685B、6222-6663

の組み合わせのほか、新に 6306・6204-6664C の組み合わせをみとめた。

木間は、土佐SK3730出土のものと同様であつて、1点には「角椽」の墨書がある。木槓は建築材を転用したものであつて、柱をそろえたもののほか、桁を転用加工したものがある。

なお、木槓の一部(3本)は、東京国立文化財研究所保存科等部と協議し、防腐処置の上現場に保存することにした。

## Ⅱ 第12次補足調査

検出した主な遺構は築地回廊および門さらに第9次調査によつて確認した神明野古墳の周濠の一部である。築地回廊および門の北側柱位置は大正13年の保存工事の際作られた溝にあたり、基礎北縁はすでに破壊されていた。

また、南側基礎も水田耕作のため削り取られていた。

以下遺構の状況について略述する。

まずこの地域の土層について述べる。東半部では神明野古墳の本体を削平した地山上に遺構が構築されている。西半部は古墳の周濠部にあたり、黒色を呈する自然堆積層上にバラス混りの褐色埋土が置かれ、遺構はこの埋土上に構築されている。

### ○門 SB 3700

門は親柱および南側柱の根石を内表中軸線から東西に2メートルずつ離れて検出した。この親柱の根石に北接して凝灰岩奇柱礎石痕跡があり、このことから門は1間で築地はそのすぐ隣にとりついていることが解つた。

門を中心として北側回廊の3間分には凝灰岩の粉末が散存しており、この部分のみは他の回廊の床面より約10%低くなっている。おそらくこの部分に敷石があつて床面をそろえたものと思われる。

凝灰岩痕跡は南側にはなく、門の床面は後世の覆土をうけていた。門の南側の柱位置には壘掘り地固めがなされている。

・築地回廊 SC 0840

築地回廊については門の東ノ間と西ノ間を採出した。東西柱間はほぼ等間隔で平均 3.93m である。築地本体は回廊床面から約 20cm の高さまで残存している部分があり、幅は東部で 1.80m、門の内端で 1.92m あり、門の付近で広がっている。また、採出した範囲では脇門のあった形跡が認められなかった。

築地は回廊床面より先に構築が始められている。まず、築地位置の基底面を叩き、奈柱をたて、約 50cm 築地を積み、凝灰岩の奇柱礎石を据えつけ、さらに不体を積みあげたものである。

奇柱礎石の外側は築地の壁面にそろえてある。そのうち 4 個は壁面から出た部分を削って整えたものである。礎石はほぼ方 40cm、高さ 22.5cm の大きさで、その中の 1 個には小納穴があつた。

回廊の部分はバラス層によって東西の高さを調整した後に、黄色土を叩き固めており、床面は両側に緩く傾斜している。回廊の側柱位置は築地心から 3.84m である。東から 1、2 番目には方形に並べた根石が残存している。

また、3 番目には礎石底面の圧痕が認められた。

古墳周濠部にあたる西半部では礎石位置を重複し、その中にバラスと粘土を互層にして地固めを行っている。その上に置かれていた根石は大部分が取り去られており確認出来なかった。

採出した古墳周濠は、くびれ部西側にあたる。

次に発見した遺物は埴輪および土器若干と奈良時代後期の軒瓦 10 枚点である。その他、「超昇平口堂」と読める軒瓦が表層より 1 点出土した。

最後に考察を加え、問題点を指摘してみよう。

第ニ次内裏正殿と独立柱回廊については、2 回の建てかえのあつたことがすでに確認されている。今回の調査では築地回廊に重複、建てかえの痕跡は認められない。一方、築地回廊の門から 9 間目の柱列は内裏正殿を囲む独立柱回廊 SC 247 の西柱列と一致する。また、門から 10

箇目の柱列はSCマダツより新しい所SAマダツと一致する。このことから、この築地回廊は又時期にわたって存在したことが明瞭である。

築地本体、床面、奇柱礎石は残存状態が良く、奇柱礎石の散欠穴は小さく、また、回廊床面上の土が築地本体の土と非常に類似している。

このことから、築地回廊および門は一時に築かれたものと思われる。

門の開口部はノ間であるが、凝灰岩敷石が3間分あったので、3間ノ尹の門のようにこの部分のみ屋根が築地回廊より一段高くなっていても推定される。

平安宮の内表は独立しているが、平城宮では内表が大極殿の一郭とともに囲まれているためであろうか。

北面築地回廊では床面に凝灰岩敷石が認められているが、今回発掘の南面では床面が敷石ではなく叩きであることに、問題が残る。

### Ⅲ 第32次緊急調査

調査地域は、平城宮東南隅宮城外の私有地で、二条大路と東一坊大路が交わる地点と推定してきた区域である。検出した主な遺構は、孤立柱建物3棟、柵マ列、築地2条・清々条・鶴々基・井ノノ基などである。なお調査地域は全域にわたって後世の削平をうけており、奈良時代の旧地表は検出できなかつた。

これらの遺構は、少くとも2回にわたる造営が認められるので以下2期にわけて略述する。

#### (1) A期

平城宮造営当初の時期にあたると思われる。この時期に建物3棟・築地2条・清々条・鶴々基などが造られている。

調査地域西方では、P地区北より溝(1)（附図参照、以下同じ）が東西に流れ、P地区東北角で南北に流れる溝(2)と合流してさらに東へのび、M地区からO地区へと廣域する南北溝(3)と合する。溝幅は上樹線（以下溝幅は皆同じ部分の幅）で、(1)が2.7m・(2)が2.6m・(3)が6.7mである。なお溝(2)の東上側縁

と溝(3)の面上側縁間の距離は1.2mである。Q地区南端部で、溝(1)の南上側縁から3.5mをへだてて、これと平行して東西に流れる溝(5)を採出した。この溝は、東行して溝(3)と合流する。溝(1)と溝(5)の間には何の遺構もなく、この部分は東西方向の道路であったと推定される。溝(5)の下方南に東西方向の溝(7)(溝幅8.0m)があり、この両溝間の部分は他より高く残り、築地であったと考えられる。(築地(6))。この幅4mの東西方向に走る築地(6)は、O地区西南部で溝(3)の面縁にそって南に直角に曲がる。そしてこの築地上で、採間2.4m・桁行各2.7mの築地寄柱のための掘立柱柱穴が部分的に残っているのを採出した。築地(6)南の溝(7)は、築地にそって南に曲がらず、築地の下で石組暗渠(8)となり、溝(3)に注ぐ。

この石組暗渠は、その後使用不能となったらしく、すぐ南に木組暗渠を新たに設けている。溝(3)には、N地区からO地区にかけて(東西方向道路の中央部にあたる)長さ13.4mの橋がかけられている。この橋は、橋杭7本の橋台2基からなるもので、橋杭の桁行は3.8m・杭間は各約2.3mである。なおこの橋は採出した橋杭の数や位置からみて、少くとも3回改修された形跡がある。

調査地域東方では、L地区中央部で東西方向の幅1.8mの溝(15)を採出した。この溝は、O地区東端部で採出した、溝(3)と平行して流れる南北溝(幅1.8m)(12)と合流する。溝(3)と溝(12)の間は2.0mを測り、この間には何の遺構もなく、この部分は南北方向の道路であったと考えられる。溝(15)の南で4.4m橋の東西に走る高まりは、築地痕跡と考えられる(築地(17))。この築地は、溝(12)の東側縁にそって南に直角に曲がる。築地(17)の東西方向部(北面)は、築地(5)北面と同一線上にあり、両者は左右対称形を示している。

なお築地(17)では寄柱柱穴は採出できなかった。これまで採ってきた溝は、いずれも素掘りのもので、特別な護岸施設は認められない。

ただ所々に土止めにしたとみられる木杭を検出した。

建物は、尺地区東部で深間 $5.4m$ ・桁行 $8.6m$ （各ノ間）の東西棟建物(9)、L地区北よりで溝(15)の北に深間 $2$ 間（柱間各 $2.8m$ ）・桁行 $4$ 間以上（柱間各 $3m$ ）の東西棟建物(14)、L地区東南部で西廂を有する南北棟建物(18)（柱間各 $3m$ ）の3棟と検出した。建物(9)は中央棟通りに $15m$ の間をへだてて2箇の柱穴があり、特殊な耳面形の建物である。

なお溝(12)で検出した長さ $2.6m$ の小さな溝(13)は、建物(14)の西壁正面に位置しており、両者は一連のものと思われる。

## (2) B 期

溝(12)・(15)が廃絶した後、築地(17)の外側に幅 $1m$ の溝(16)が掘られた時期である。建物(18)に壺後して一部検出した北に廂を有する東西棟建物(19)（柱間各 $2.4m$ ）も、この時期のものと思われる。但し、A期で造営された築地や溝は、この時期にも存続していたと考えられる。

特に溝は、平城宮廃絶後の平安時代にも使用されていたことが、出土遺物から推定できる。

その他に造営期の不明なものとして、尺地区に平行する東西方向の溝 $2$ 条(柵(10))を検出した。これは南北 $3.5m$ をへだてているが、南北の柱通りが一致するので同時期のものであろう。

この柵のほぼ中央にある径 $0.6m$ の円形掘方(井戸(11))は、柵柱穴との重複状況からみて、後者が新しい。

以上これまで検出した遺構について略述した。これらの遺構の配置と平安宮東南隅を比較してみると、両者は極めて類似している。すなわち、溝(1)は南面の外濠であり、溝(2)は東面の外濠にあたりと考えられる。

これは、溝(1)が宮域西南隅の調査(第14次調査)の際に確かめられた南面の外濠SD 1250の延長部に、また溝(2)が宮城東面中門の調査(第20次調査)で検出された東面の外濠SD 3036の

延長部に、はなすることからもわらべられる。従つて、築地(6)は、三茶一坊の北東を限るものになり、溝(7)と溝(8)との間の道路は二茶大路になる。

また溝(9)と溝(12)との間の道路は、東一坊大路になり、築地(14)は三茶二坊の北西を限るものになる。今回調査した東南隅の部分は、平安宮とよく似ているが、異なる点も少くない。

例えば、平城宮では、平安宮にない南北溝(2)があること(この溝は第22次調査で検出された溝SD3410の延長部であると推定される)。東面の外堀が二茶大路を横断して南に流れること、従つて東一坊大路路面幅(濠溝間)が宮城東面と以南で同じであること、また平城宮では二茶大路が16丈、東一坊大路が11丈(いずれも築垣心々間)と平安宮より、各々1丈ずつせまいことなどが平安宮と異っている。

遺物は種々の重要なものが大量に出土した。特に溝(9)から数多く出土し、屋瓦・土器・木器類・金属製品・石製品など多量にわたる。主要なものをあげれば、糠柑軒瓦・墨書土器・土器・土鏡・木簡・人形・硬玉製勾玉などがあるが、特に注目すべきは金属製品が多量に出土したことである。

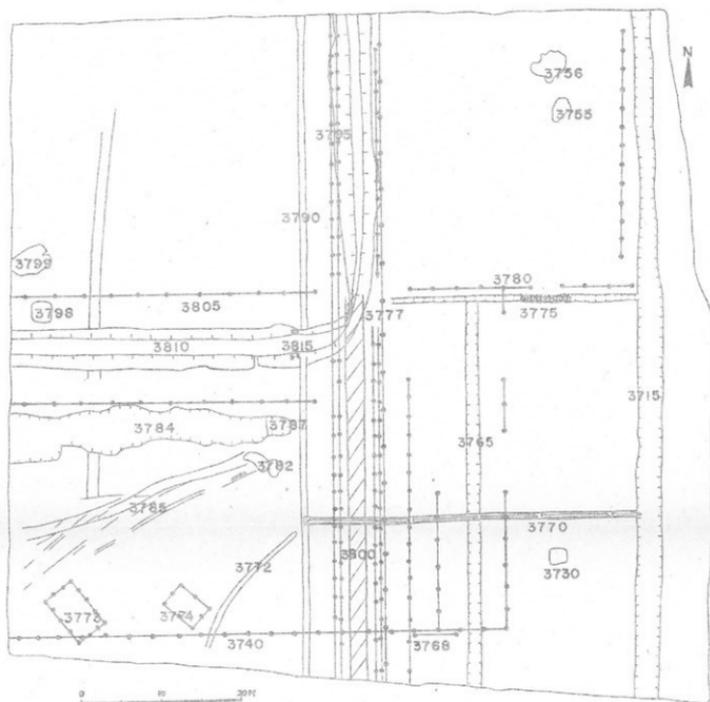
品目も銅鏡片・銅銭・海老鏡の鏡・飾り金具・武器・工具・針・釘・釘金・玉類など多量にわたる。

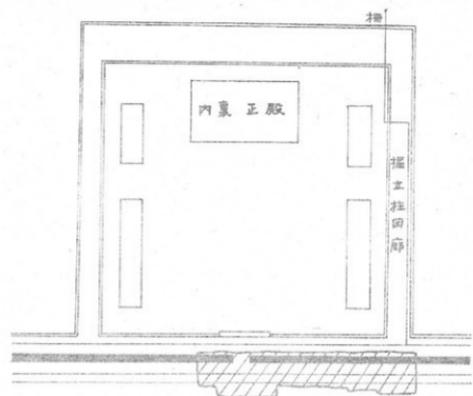
隆平永宝の如きは一括して160枚以上も出土している。また鍔やブイゴの破片もかなりの量出土しており、鍛冶関係・宮工場の存在を推定させる。

不 簡

- ND  
69 「人給所請 鯉牌拾袋 海藻湯料 四月十五日百勢大鎮成 - 6015
- 96 「 宿  三人 (活途YK) 未送  淋吉 淋 6015  
「廿七色 八別九地 十月十二日永宮甚」
- 96 「少尉殿料 六月廿八日 (會生)  1 6015  
「運送袋料三斗一分二合 十一日奉日袋六斗  1  
(E.A) 日各日袋四斗
- 07  
66 「板柱九枚 見役十人 土師役人 以L.C.M 左前土  乙寅子 (會生) 6015  
去創 若森殿  土師役人 以L.C.M 左前土  乙寅子 (會生)  
「六月廿三日廣井字石 (歲時野)
- 06  
66 「可否送來大寺司  1 6015
- NE  
30 「 主工番四斗 1 6015  
「二月廿五日」
- 06  
66 「 廣刀自」 6015
- ND  
57 「問食一分 飯治相作料」 1  
「廿日大市」 6015
- 00  
87 「謹辭 申請問食等  人」 6015  
「江國兼太郎
- NC  
57 「紀伊國白高郡調運三斗」 6015  
「壹龜五斗」
- 0N  
46 「 廣高郡唐米五斗」 6015  
「 部酒人」
- NC  
49 「燒炭一人 將暨紀朝臣曹司一人」 6015
- ND  
57 「七月料要割錢五貫五百匁」 6015

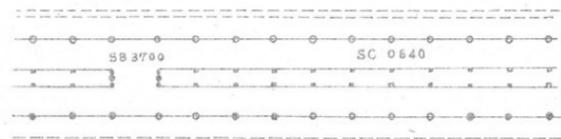
# 第27次発掘遺構配置図





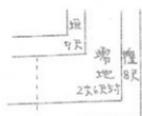
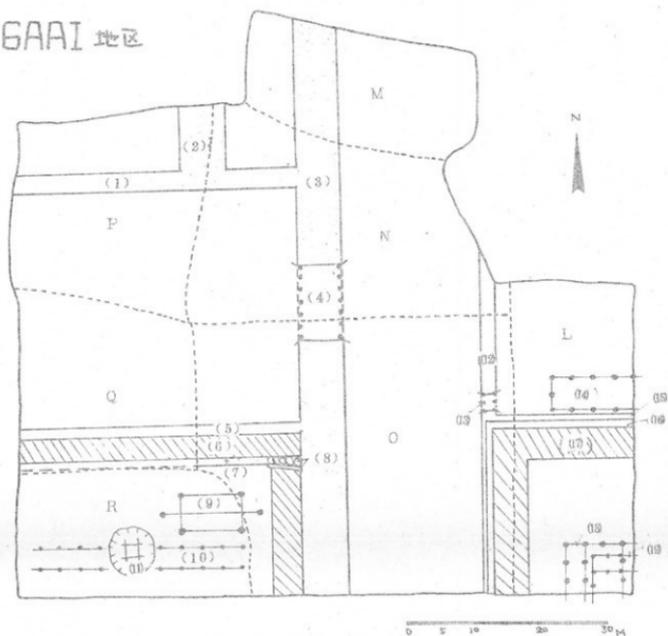
第12次(補足)発掘地区図

遺構復元図



# 第32次発掘遺構配置図

6AAI 地区



障子間口丈

障子間口丈



大窓大器 12丈



障子間口丈  
障子間口丈  
= 障子間口丈

障子間口丈



平安宮東南隅  
「大内裏四巻証」  
12-83